

長寿・家康公に学ぶ

静岡の米と自然を愛し、健康主義&エコ生活を実践



「狸親父」「したたか」などと表現をされることもある徳川家康公。

だが、その真の姿はあまり語られていない。

古文書をひも解き、独自の視点で歴史の解釈に新風を吹き込み続ける

静岡文化芸術大学准教授の磯田道史さんが語る家康公とは？

その人物像や静岡との関係性から、新しい家康公像が見えてくる。

芸事が苦手だった家康公
質素儉約で豊かな老後

―策謀家として語られることの多い徳川家康公ですが、先生が思う家康の人物像についてお聞かせください。

老かいなイメージがあるかもしれませんが、家康は、実はとても明るい性格だったようです。家臣たちも家康に対して尊敬の念を抱きながら、非常に親近感を持っていました。もし僕たちがタイムスリップして家康に会えたら、気さくで子どもっぽいその人柄に、拍子抜けする程だと思えますよ。

―名将と呼ばれる家康公の弱点や不得手だったことは？

能や狂言など、芸事はあまり得意ではありませんでした。豊臣秀吉の家臣時代、秀吉に促されて能を舞った時に「狸が床の

上を飛び跳ねているようだ」とみんなが笑ったそうです。家康は能の稽古に時間を割くくらいなら、鷹狩りをしながら地形観察をし、その合間に村々を回って腕っ節の強そうな若い男子を探して家臣団の強化を図った方が、よほどに実益があると考えていたのです。一時も時間を無駄にせず、常に自分の権力を維持することに全力を注ぐ。それが家康の真骨頂だったと言えます。

―無駄を嫌う家康公。日々の生活も質素だったのでしょうか。

そうですね。家康は普段から、非常に質素儉約を心がけていました。例えばこんなエピソードが残されています。ある時、駿府城内で奥方たちが「漬け物の味が塩辛い」と台所係への不満を訴えた。事の真相を尋ねる家康に向かって台所係は「美味しく味付けをすると、女たちはい

くらでも食べます。儉約するためにわざと味を悪くしてあります」と耳元でつぶやいた。すると家康はニヤリと笑ったそうです。また、履き古した足袋を捨てて前に一旦足袋箱に入れて再度分別し、極力リサイクルをしていたという話もあるほど。天下人になっても決して奢ることのない家康の堅実さがよく表れています。

―現代人が学ぶべき点は？

家康は人生の時間を上手に使った人でした。単に長寿だったというだけではなく、食に大変気を遣い、贅沢をせずに健康な状態で「長生きをした。彼が実践した、老いてからの暮らしぶりには、高齢化社会を生きる私たちが第二の人生を豊かに生きるヒントが詰まっています。『命は食にあり』を座右の銘にしていた家康が普段から麦飯を食べていたことは有名な話ですね。

家康公まめ知識

①「実はとても明るい一面も」

政治の際には勇断を下す家康ですが、実は子どもっぽさやひょうきんな一面も併せ持っていました。家臣たちは会えば楽しい気持ちになっていたようです。すし、外国人の宣教師が家康に会った時の印象を「愉快な容貌を持つ尊敬すべき老人」と書いた記録も残されています。

②「長生きしたかった訳」

家康が長生きしたかったのは、徳川家の繁栄と生き残りを常に考えていたからです。子の秀忠に將軍の座を譲った後、自分が死んでしまったら豊臣家に天下を奪われかねない。若い豊臣秀頼に心を寄せる西国大名が大勢いるという危機感を抱いていたのでしよう。家康は何としても健康に長生きをして徳川の世を安泰にしてほつとしてから死にたいと思っていたのです。

浜松東照宮(引間城跡)は 日本史上最強のパワースポット

―静岡県と言えば、家康公が幼少期から青年期と大御所時代を過ごした地でもあります。家康公が静岡県に与えた影響は大きかったと思われませんか？

家康が駿府に移るまでの17年間、いわば天下人へと駆け上る前の足固めの歳月を過ごしたのが浜松市です。一方で天下を手中に治め、地位を固めつつ



静岡を選んだ理由は、大きく5つあったと伝えられています。一つは幼少時代を暮らした郷愁の思いがあったこと。そして富士山に抱かれて景色が良いこと。さらに、気候が温暖で老いを養うのに最適な地であること、お米が美味しいことなどを理由に挙げています。そして何より、地形的に要害堅固の地であった点

が大きいようです。東側には箱根の山が控え、富士川、大井川、安倍川など大きな川に守られていたため、軍事上非常に都合が良かった。当時、箱根の山は道幅が狭くしばしば大渋滞を引き起こしていたため、箱根より西に居を構えて西国へ睨みをかける意味もあったようです。交通の要衝であったため、参勤交代に向かう大名と会合できることなど、様々な地の利によって家康は駿河を選んだのです。

―様々な歴史の舞台となった静岡県ですが、家康公にまつわ

あった家康を選んだ地が駿府、今の静岡市。この家康が過ごした時期の違いは、静岡県の東西における県民性や文化に影響を与えました。浜松城(当時の引間城)に入城した頃の家康は、武田軍との戦の最中にあり臨戦態勢の荒々しい時期。野を進み、戦場を駆け回る時代です。それから、行動的で躍動感溢れる気風を浜松に残しました。その後、出世街道を走り始める家康が浜松を去ってしまったため、ここには数万石の小さな大

名が置かれることになった。家康によって立派な城下町が築かれた地には、戦の中を生き抜いた勢いのある町民が残され、力のない大名が転勤族として一時統治しているわけですから、民が力を発揮した実利的な町になったと考えることができます。

家康が駿府に移るのは、江戸に幕府を開いた後、將軍職を秀忠に譲って隠居生活に入る時です。徳川時代の基礎が築かれたつあった平穩の時代。これからは「馬の上」つまり戦ではなく、文の力で国を治める「文治時代」が訪れるという家康の理念の下で、駿府は戦の拠点ではなく、文教政策の中心地になっていくわけです。このことが、現在の政治都市・静岡市の礎になったと考えられます。

―それでは、なぜ家康公は大御所時代、文治政策の拠点に静岡を選んだのでしょうか。

かけとなり秀吉は気に入られ、飯尾家配下の松下家に勤めることになったという逸話が残されています。その後、しばらくして引間城は落城しますが、三河から東進を目指す家康が入城。ここを根城に城を拡張し、城の名を浜松城と改め、遠江一帯を平定する侵略の拠点としました。秀吉と家康、二人の天下人にとって人生の転機となった浜松市中区元城町1-1、つまり現在の浜松東照宮の地は日本最強の出世スポットであると言えるでしょう。

いそだ みちふみ

岡山県出身、浜松市在住。2002年慶應義塾大学大学院文学研究科修了、2012年より静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学准教授に就任。古文書に隠された様々な歴史のエピソードから独特の視点で研究・分析を続け、これまで未開であった分野にも新たな角度から切り込み、歴史をひも解く。江戸時代から武士社会の表情を記した「武士の家計簿(新潮新書)」をはじめ、「殿様の通信簿(新潮社)」、「近世大名家臣団の社会構造(東京大学出版会)」など著書、論文を多数発表。

③【浜松市】

29歳から45歳まで17年間、家康は浜松で過ごします。「浜松」という地名は、この時期に家康が付けたもの。浜松時代の家康は、信長の下で腐心し、武田信玄と激突した三方ヶ原の合戦で、生涯最大の敗戦とも言われるほど無残に敗北するなど苦渋の時代を過ごしました。

もつと知るには…

P34
〜
P39



浜松城

④【静岡市(駿府)】

家康は隠居する際、徳川幕府を脅かす者たちをしつかりと抑制し、監視できるようにと駿府を選びます。事実上は江戸と二元政治体制だったため、当時の駿府は政治、経済の中心地として

大いに繁栄。現在の政治都市・静岡市の礎が築かれました。

もつと知るには…

P18
〜
P31



駿府のまちを望む

⑤【浜松東照宮(引間城跡)】

三河から東進した家康は、遠江一帯を支配するため、引間城本丸(現在の浜松東照宮がある場所)に入ります。わずか50m四方の狭い空間で寝起きをしながら城を拡張。浜松城と改名した後、ここを拠点に甲斐、信濃へと領土を拡大しました。まさに、徳川家康の飛躍の地とも言える場所なのです。

もつと知るには…

P34
〜
P35